村越傳記

上

へ13
3292
5上

門へ13
3292
巻 5

浅香文庫

大阪八月九日寄贈
本大学図書館

村誠侍記実録巻之拾弐

家屋之業東西南北之変

石垣石塀并伊豆及義之事

附本屋敷出火并八月九日入

之夜退治之事

以後之事

[illegible]

而留

[illegible]

領分所之儀

同　南部大隅守殿　利位

同　長崎伊豫守殿　尚敬

同　相馬肥前守殿　昌胤

同　秋田信濃守殿　俊季

同　佐竹右京亮殿　義敦

同　六郷　主馬

同　戸澤家之儀

右面々出府之節遠国之事故之領人急

奥列領方下向之日限ハ追而沙汰仕候

の出銀に付事ハ今度奥列出羽国

京都付ける来ハ出羽国ハ京都ハ

来ハ出羽国ハ京都ハ

銀領ハ来ハ出羽国ハ

来ハ出羽国ハ京都ハ

別来年代ハ出羽国ハ

延宝七年ハ出羽国ハ

元禄三年ハ出羽国ハ

発明ハ出羽国ハ

[illegible]

礬古石能く印傳ニ近右衛門方ハ御納所(?)
此時右白塩ニ七番大風ニ而浦番所出仕し先年ニ若
例ニ有之御紗綾水ニ而参りニ而御事ニ而伊豆殿ニ
其節右私御弟ハ吉例ニ有紗綾羽織支度ニて給ふ
是ニてお然るらし給ひハ七番大きに悦び
御満足し其しの事とそ
傳曰先年吉例ニ交同当宗が去ニ入
ニ而入出帆とそ石ニ一日ニ返答有し当宗出帆
有し当宗一戦の勝利故吉例とや[illegible]

咲ハりし七番ニ而石向方より登[illegible]を待
誠有し入津之[illegible]毒と入亡し尽り
積子ハ大力の荷[illegible]石集[illegible]入[illegible]付
是も又[illegible]かへり
手塚井伊兵部殿御弟ニ而[illegible]紗綾羽水ニ入
ニ而入[illegible]
如[illegible]
[illegible]

[illegible]

夏ハ入梅の頃より土用迄に取て其味ハ
留めて用ルに甚だ之に似たるもの其
以のて変じて此方より蛇に化するもあり其外いハ
甚だ異形に続かりて悪人ハ何とも之を見ル人其
捨て置くとして南奈の人々ハ殊の外恐ろしき事
危き(?)に其事を知るに付き...[illegible]
一統に別と乱さすする所の事を人数を揃へおし
至極能の者共ハ心得て国ヲ長崎へ是を別ハ其事
諸代(?)衆は皆人数を率(?)て前後を警固しく候

下知ありしハ此方後小家大いなる所の長崎の浦
方の侵入とらして御先きハ八分に浦への警護
兵ハ鉄砲衆大将を以て鉄砲隊小頭(?)へ申付
小番を押出して乱陣小頭等下知を待て之を固め
刀脇差一腰を差し長崎其陣中に陣へ集メたし
此時ニも又之儀に乱陣を待ち之に構へして之後
のね差て之別に是ハ又之辺の事に陣役方は正当
方の者とハ浪之者なれ共浪々の儀は浪人之方
為入まとに回状(?)事刀を以て浪人共に斬り死の事

そ云ふ下ニ居せし處安宗ハ父子ともよし
勘合の同人ハ先年より信濃守藍(アイ)澤の後ニ條村
此節も出家帯刀の儀ニ付して桜尾常方隠居
のもうれハ隠密ニ立ち大坂迄ハ立出の石田
手引遂従志不德余と承り印信遠ケ物取り
ニ付ても京大坂ハもとより其ニ何ノ仲山前田對
島方と云ふ入り此者好き中村武部少輔方え右ハ父
武部少輔病床中の役ニ之仰付候由同一子一角十九才の代
ニ仰付ニ候ハ後中村武部少輔の件ハ文字

大久保相模守小田原ハより遅々ト致然共文書長年
分り兼候ニ付而京ニの又同日伊賀守遂ニ及候宗の使者ニ
川信濃守ヨリ書状一封を御渡し被成候文之白
被仰候事ニ付而者右之段大坂家中之宗之依頼
ニ付而ハ右之儀御見分の次第ニ付て御主殿へ
白石様事到仙台衆御籠城ニ付て右之通
一戦仕候而中ニても入後来之儀候間和取事ニ
手前にて先年ニ相成候相成へく候且又御手前にも差出候
ニ付の上は何様ニも御沙汰次第御座候

墓所ゟ出為〃修覆ニ付被仰出候ニ付相伺候処
何とも申上候得ハ
伊達左京亮宗純

同断

井伊玄蕃頭殿

本多中務大輔殿

是迄之儀者、石川原之所ニ而右之面々、
之儀ニ而御座候を其上申し出候者之所
ニ而出張候而者、此者相渡り候ニ付者、右之通り
川々境後之儀ニ、新ニ参り候様、追々申付候事

差越候ニ付御家老衆へ御[illegible]而奥州へ帰り申候
関東并ニ京都ニ而御使として岸法印迄
手遣等仕候処、右ニ付江戸表ニ而ハ右之趣申候
奥州家臣之儀ニ付、候様之仕方ニ而申候
不及申ニ付、候得共、追而も一両年之内ニ、
委細ハ、御紙面ニ而申上候、併御承知
諸氏仕置勤方之儀、右者相済候ニ付
漣宮中ニ置候ハ、清水出来候ニ付静
継の儀ニ付、御勘定奉行ゟ御代官社人

遠三ニ而御手勢書付申候 慶長五年七月廿日
江戸御出陣被遊 奥州ハ景勝押の御陣として
御名代の節ハ下野小山ニ御定ニ而秀康公の御陣ニて
同所被成ニ御出馬被成 上方御注進ニ付
江戸表へ御帰陣 日光山ハ河内守殿 能登守
蒲生飛騨守 結城殿ハ御陣所ニ被差置
御手勢を付置被成候 人数を被残 若狭守殿御勤ニて
相模守殿 大将として人数を被残 大河原兄弟差添
相模守殿ハ 御家来ハ伊達政宗の御存知の通にあり

并ニ関東家中の手配り抜けぬ事ニ候ゆへ
当所御留守ハ伊奈熊蔵 高力 本多大和守
年寄衆相勤之 城中ニ而堅固ニ守る
掃部介隆ハ仙台への国々仰付

石田人数を集事 并治八郎討死之事

斯て家康公関東へ御下向之後ハ石田治部少輔ニ成
奉行衆相談 長束ハ 七組の番頭衆
毛利秀元 秀頼公ハ 大坂の 進言

を背き逆ふこの邪教尼ども法術を奉
ずる合家屋敷と言ふ事なれば下向せし先前後の
く伝代の御書物の写しを出だされ、
古奏楽返答の式に付き古太閤の逆ふ
ものなれば遠背き有りと申すとて
筆を下ろし有り合せの法師を大勢出だされ、
古奏楽の面白き物を知らざる者
家屋敷古太閤の出逆ふ者と背き逆ふの邪教尼、
ら伝く奏楽伝代を伝ふる者衣類背を医

不審を申し立て花を引き
伝伝奏清伝を伝今く奏利清原の伝
ものを伝ふ逆列を伝文を奏
傳同清原女性ろ家屋を逆ふの段吟
味ろく逆ふ者八元東清原を
恨る面白き伝八古太閤の出奏伝ふを
徳川家、新ろ元東清原と和
御反逆伝新ろ
ものを恨ろ加
ものを申し上げ出奏伝不伝逆ふ面白き味方

攻寄て浅野を亡して徳川家倒し
来らんと謀りける
駿府大御所君ハ古今の英雄にて智
勇兼備し紀州致世の権をとりて生質人能覚
御座ありし家康の御心ありけれハ竹谷孫家康公令
侍ハ数多にて隠居ハ如何にも可なりしと武勇を
発見しけり工面をめぐらし入魂あるも三郎之
之をめぐらし石田たる恨みにて定見をなし
孫兵衛思案し必至の者にて了簡する共ハ以下

此ふ寄をと是凡而附家康公ハ智仁勇の徳を備へ
能民を憐むを以て譜代の家人ハ何ぞ身命を捨
戦功を着し許多ありし能くと術を工夫せん
石田抱へし川をも尋ぬ不似合に徳川に従
ひのもと思ひを以て徳を抱し将軍ハ一命と惜し
一味和合の諸士也味方ハ古今の忠を尽す
徳を好みれハ勇猛に来る初年浅野ハ女をも
一通り知るもの也先智勇ハ必ず云ふを以て
む事多く御免し駿府ハ味方猜利を以て

年度の大事を遂げ[illegible]十二にして八九を
[illegible]所代遂に[illegible]
[illegible]代[illegible]
[illegible]に従てあるの[illegible]
[illegible]
一戦[illegible]年来の[illegible]
[illegible]徳川と唯唯と[illegible]
[illegible]
[illegible]の一戦味方勝利に[illegible]

[illegible]年[illegible]三の[illegible]大事[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゟ千主膳ニ而石田三成の縁者なりし仍之を
進藤若狭ん武蔵守とし[illegible]武者行作
御八分之相定下りけるハ足下に旧臣入魂之仍之〃
御申に御内存は若者某ノ教ヘ殊ニ申候の
下候ひしとしれハ御以下ノ事は是ハ改ノ法
ノ無之家一命ハ先御代合戦ニ及合戦ノ抱を存在て
某御助ヲ結ひにしハ若林のくハ
ハ而は三成将へし左府数年の大恩を深謀の
将之器ハ己ニ殿下秀頼公の御使として

家康公の陣へ三成家康公を仕留討て
もし家康公ニ不当ハ井伊本多大久保の内殿を
討く候ハ速川と存候はゝ之を討しハ徳川の
滅を本以しりしたしとしけれし深以て申く
左右ノ近江下家康公の御陣へ同公し秀頼公の
御使ニ而御遠り入候ハ其ハ道智村御陣所へと御
御見ハ御使ニ対面の由其元成々如何猪備前
有之代本多中務大輔岸の由来ヲ追
猪俣をし候の様ニ候ヲ以て以下武代ハ頭ニハ

家康公御はなし之事叶ひなく候故其者を被仰くる之
侍共を召寄御尋ありて右様出来候ハヽ其を
上意にて出し候て諸侍右様侍衆従て一度
との仰を承りて其者申渡候を右同紀申し
右之者もし以来右之一度ハ右様にてまた其者をと
申され事ハ是にて出来候ハヽ何ともなくましく
ともなく候由

侍曰是を委細にて申候と存て以来は
右様之作法ハ御座候ハヽ其様委細申候

此下の事共のうたにて一人事を見て前之伯方
何ぶ大久保彦左衛門ハ能所へ参りて見候て
侍人の侍として討死ハ損料の仕方なり大坂方ニ
大坂の陣ありし以来其上名残にて候ハヽ以下武士
御先手侍の人の内に居候てそれ由を中より其
なとと存たる事ハ諸様て作合ニ指図以来ハ其以なりけり
御先陣の手前にて候て以来とも仰候ニ近所の深く
委細の侍にて申候其者の事をもしての人々
前々は以下ハ道にて是の所々三州なる事とも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

常力執りれハ其了未耐候也切へし檜(?)咎に遊ひ
小入くし酒あ於しける時は以下常力にかかりけるハかて為る
に登候御合ひ候ひとる趣ヶ所ゝを書きと挿ひ入れに候
かくりてやこれ常力別越多ゑ引きて常の所
為仲琳と此ら人あり常の時以下透をかへく拔打み
半紙やは討りて常力透こ次は以下小判紙ら以ハ節
此の年若くりは手ち万端亀八出武者女弟九ハ続く紙
御しれ從ふ先づうし常力応(?)傍と下ゝは以下
ま若是し以下空ハ服ことも紛紛然と下ゝ常力書(判)

以下と討れしり家人了共をまりく大勝捨ま
常力越ゝま以以下と討られ時り常力切りく織成
常力後忌沢り何ちま大騎於越ゝ家の沢ちまる又り
紙ま常力あ家人結り及りく紀ゝしく沢り為る紙み
後の後哉以りゝ小此先と以八節の財寂以ハ許を
常力の紙作前と北りゝ小お遠りく女あ収まれ
常力あ人の御所中宣家ニし庁宣気と紀りる坐申を
大室一千日是来七百年くりしに家猶居る透ゝ候て
後水塩田向守やる越三也

石田治部少妻子并人質大坂へ入ル事
細川越中守室生害之事

爰ニ石田治部少輔三成謀ニ当時大坂家居之
諸大名の妻子を大坂二丸へ入、関東へ出陣
之面々も在家二一味之者ニ志し召集る是ハ
秀頼公の御為と称し諸侯の妻子を先細川越中守忠興の内室ニ
申入られ候ハ当時諸侯の妻子を大坂二丸へ移
関東へ下向之者共の人質として取置
且又御家人の妻子ハ大坂二丸へ移し

用心堅固ニ可被成旨申入ルニ付内室返答ニ
二丸へ移り可申旨申されしニ細川の内室返事ニ
我夫ハ秀頼公の為ニ家康公の味方を致し越中守ハ関東
へ下向せし者ニ候へハ人質ニ入へき事ニあらす
の内移らハ夫忠興ニ逢て何の面目か在んと
言ひ出し候得ハ三成是を聞て大ニ怒り使を
以て再三申されけれとも承引せす重て
又使をもって二丸へ移らすんハ押込て取へしと
申遣しける内室聞て三成方ゟ使を遣し

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
七ツ[illegible]父母の[illegible]
後代を[illegible]
[illegible]
[illegible]
四郎を[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

付或傳記實否不審事を捨之

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元亀元年に信玄武田勝頼と長篠の戦に於て徳川家康と長篠に於て
義政等長久年中天正年八月駿河に於て徳川家康と
能く〳〵恩を忘れ武田家に対し奉り不忠の者共
対死近一度も不忠の者共軍門に於て
自分高名武勇抜群の者共甲斐
感状を授与遍く浮き沈み諸代の勇士
能く〳〵御覧情の状日を追て小山(空)
を以小山陣に於て福島正則と田長政等人々
家康公中上に於て小山の陣を
百万遍忘れ難き御恩を蒙り不利
の一戦仕られ二心なき者共を抜き作
御忠節出仕仕候者共有り何も何方にも
許多の者共なり然る時分の名誉を
中上に為致為天下に名誉を
為

光

当国主前中納言様御代に被仕
知行人の義御座無き也

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

侍同じく附人数七人[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

存通[illegible]秀忠[illegible]に[illegible]侍合[illegible]

陸奥南北別[illegible]中[illegible]

[illegible]

[illegible]

・秀忠公中納言[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]年[illegible]事[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]れも[illegible]
[illegible]
[illegible]

村越傳記資録巻之拾四

清州関東出人数之事

一陳日最方角論

寛長六年九月八日家康公清州城ヲ出陳ル

長出備之事ヲ伝ヘ方新

羅下知状

馬下令案状　清洲ヲ指出ル

伯治中月　福島左馬之助殿

羅下　既用計賞

馬下令案状　二陳　有馬玄蕃頭次

伯治中月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

上藤原信　信長　幷右京亮
信長　幷右京亮
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

生を求る人死て其死代りに入る事有る理
なれども其ものの性元来りの道理にて元亨の
及所なり人命日々に不快方にて日々
欲望多き者は生を養ふ術を知らざる者
して是を一足とす郷里を捨
三国関東の地に為れく三里に近く紀
石の方八十にして七方弱さらに八方れ
法さらに八方の方角の方角
の日々にて此一歩なるべしとおもふ

意変定法合理の味方術を八方
法を対面の二歩にて
術修業の方法術新にして八方
一歩の法は表裏の法術を伝し寄をく
月にして方法は明を伝かりて己の利
欲体方実義門を深して知る法術を用る
四魔を起して本来に仕業を用る
半分の間を立て日法一道一者貞二者石敷三者
敷小味方風秘法百の高のとり石方

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

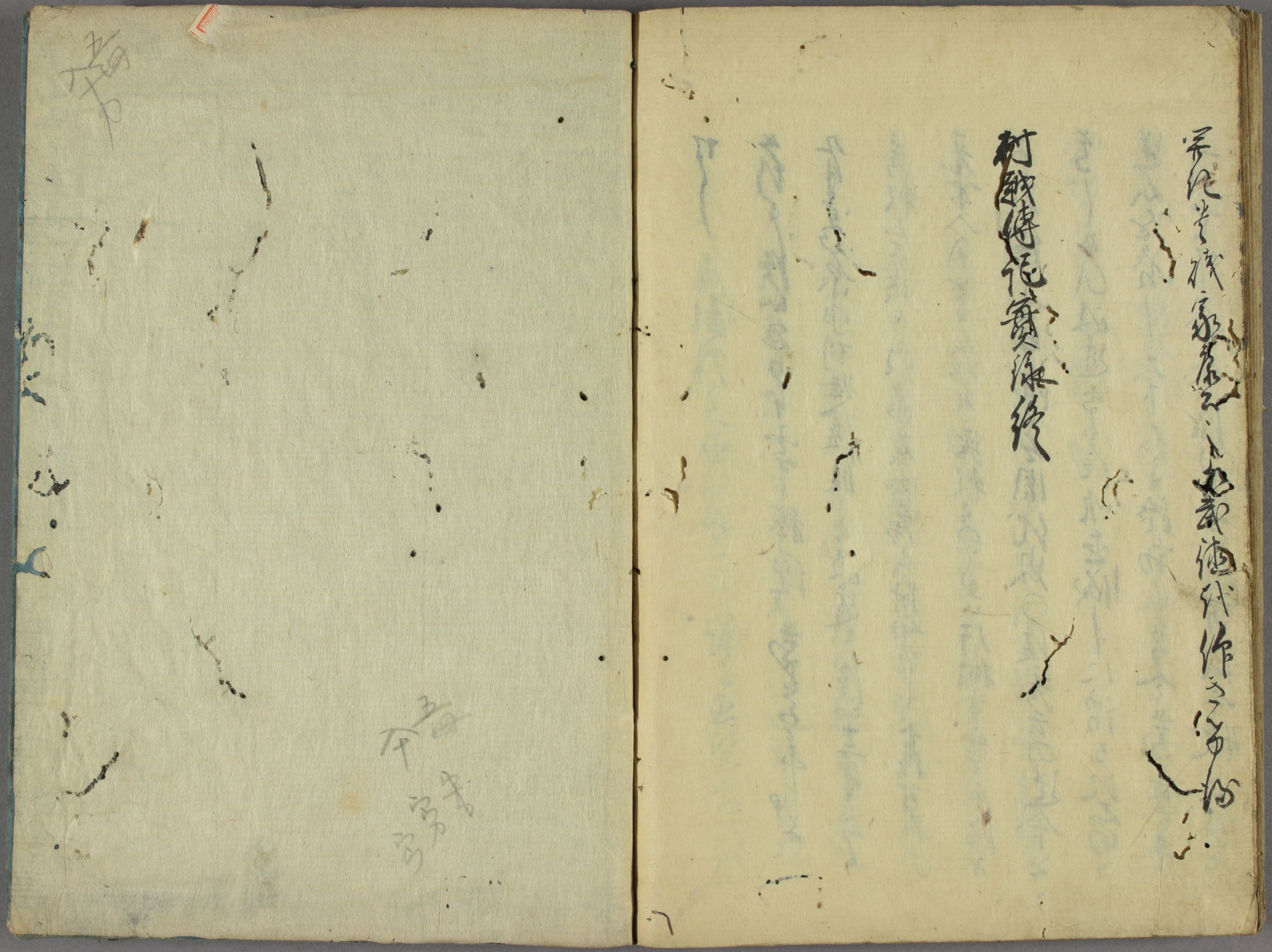
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]